

Kodak

LICENSED PRODUCT

© The Tiltan Company, 2000

KODAK Color Control Patches

Blue

1

2

3

4

5

6

7

8

9

Cyan

10

11

12

13

14

15

16

17

18

19

20

21

22

23

24

25

26

27

A

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

15

16

17

18

19

B

17

18

19



重鐫

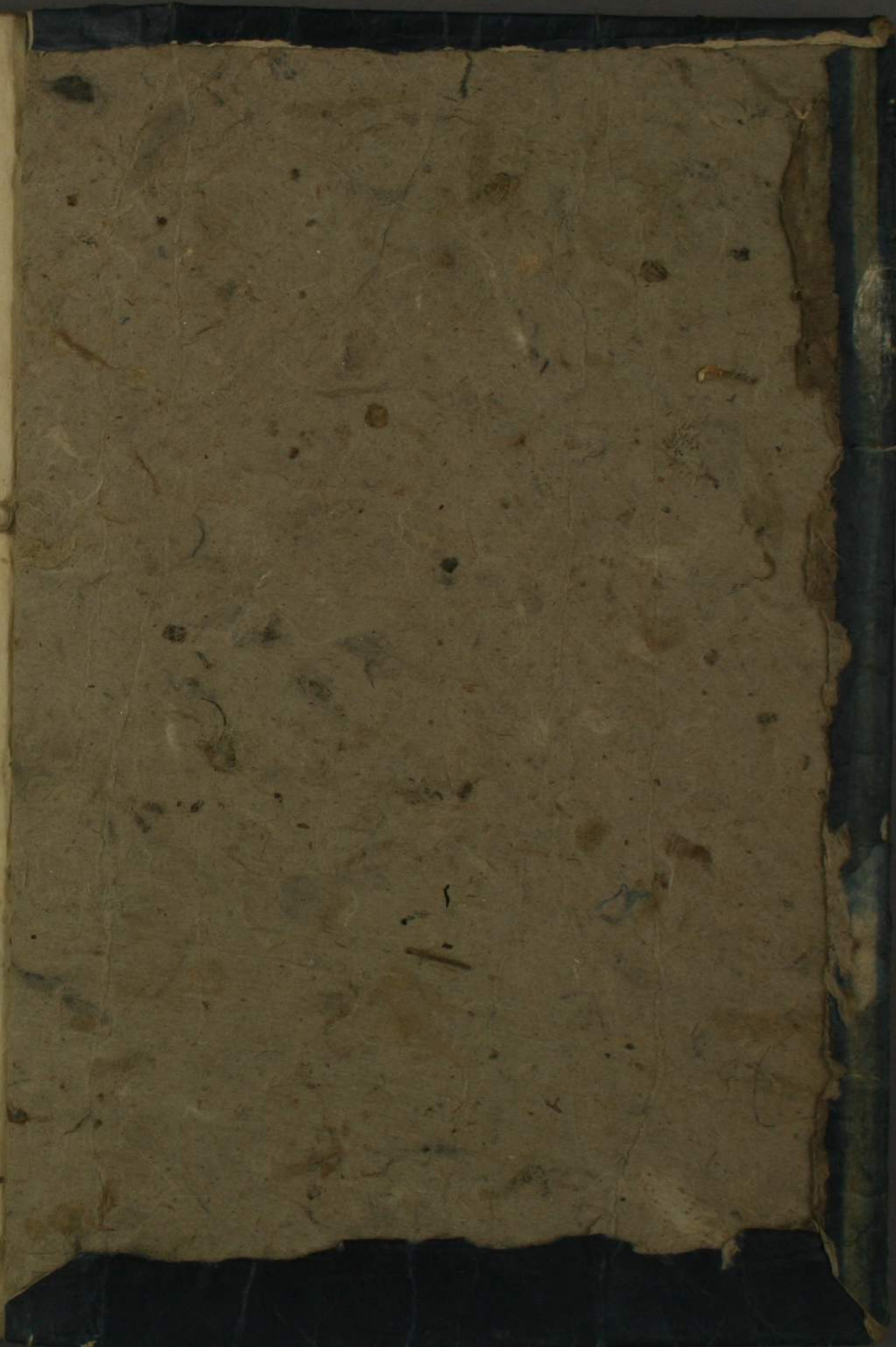
日本書紀

冬

76
1559
5



182
22



とありしはまのりつものか

千金方に曰く冬を天陽の氣閉血氣伏邪有よ人
を又勞成あり汗とわ陽氣を散泄するす

月令廣義に曰く冬は万火を衣服とわめり
事只の暖を求むるす大に寒をれらるす
臥疾瘡瘍熱病とらまふ

本草書に曰く冬は火を衣を暖むるは
厚衣よ久しそやめされ血を擦す

金匱要略に曰く冬は夜足と伸とせよ身暖あり
又雪及七載に曰く冬の衣被とまふは妙大

暖なりし睡意多り時目とたり氣を吐くは積毒
とせそ病あり冷物鉄石を枕するはかま
人をして眼勝るむ

月令廣義に曰く冬月子丑寅卯と出り時を必盃酒
と飲くと邪とせせく一我喜置をあらむと又
可なり元陽といむ物志に曰く冬月の動毒
多し晨を服してこれと相ふかられむ
王肅張衡馬均とよもの三人籍と埒して晨
はもふり一人を病一人を病一人を病と
成とるぬるは死すもの也

書と刀の作り又室の天皇二十三年十月五日辰と申
 日一より一よりぬきとこれ又ありは又より一より
 まつて國史をよむを志すれはつきてあれをよむ
 警乃吉乃一人一源氏物語よみけといひつりまひ
 と何せのまの日月館の跡とおむりもくわくん
 梅すう二月令彦義よ五の書と引くわく十月
 日餅とくく一人をうて病なりしひ又新編
 花言ふもかくちの女りされそをよむと
 ちよつりてあれ多くみとうじよより
 かれとうやと婦人女子のたれよれよあり

事なりし程とつりおれん今又
 十五日に元乃節と号は四月十五日と元と七月
 十五日と中元と十月十五日と元と元と元
 と号は及家乃夜あり

晦日沐浴

し月^{なつめ}暮^{あつ}ありこれと液雨と云和信とゆふと狂す月
 令彦義よつて國信^{のち}立冬と元後十日と入浴と
 雪と雪と出候と
 寺内珍々
 元と元
 号信曰これ又明日といふと元と一儀する事
 梅るにありし夜流よありあり

五月紅梅と取て皮と削本串につくぬき又葉より糸と
 むきひて日干し晒し皮と分つてはそより糸を包て
 焚せしび又梨子と收まきし梨子と收り此梨子と
 穀類茶と心く梨子一顆入さしえさこあつたり
 酒茶もさすおよまむ久よ塩の風をよあつたり
 月今度穀より入えたり又抄せたり大梨とあつひ長
 葉と丸より葉に挿し紙よ包て晒せたりあつて
 人喜深くもむおしく抄せし抄と葉より柑橘を
 又びとくすししと長葉を角より入えたり又梨子
 と漆りてぬれハスして抄せし又抄お成志み

梨子と收まきし葉と心くして梨子の付合さるや
 うにとれハ年と経く抄せしと入たり

五月乃末蘿蔔の中実一たつと蒸すし十一月
 まで入れハ中虚してあり

○蘿蔔醃乃法 蘿蔔 千本 細粒 一石 麴 二斗 塩 二斗

先方根と切日干しありと後細粒と塩麴とつりし
 合せ桶乃底より蒸す蘿蔔とあつて上より又粒塩麴
 とつり何つんてをぬきししはは久しく塩入

○又法 大方の蘿蔔中より塩入半入せしとけきて
 片れより財用の先より塩多入れあり又ぬきあり

たると入つて

○又法 青蒿とよくほひつらちあり毎粒席と地ひ
茶小少あつてかく後まるとあつて氷守たに何は清
青蒿一つんかへ塩と青蒿かこゆわこまうへまよ
鹽とちりあひほくとに清やとりけまへへ又ちねく
ほまこ後へ酒乃糟と米糲塩とつらまよたの大根と
あひくほひ乾方何清なと

此月又竈を修繕す

げ月梅子の熟熟せりて取りと賜へ茶とへ又あ
清とす但茶の心のつと用のあふと梅子と云

又月今度兼よつて十月は梅子の熟すとあつて
乾し身善三月は梨とくうぬあつて灰土とく
あひ茶とくゆりこくへ次は辛梅へ裁まに定
けしてまると結ぶとつて又月よまに本はてまよ

名物畫巻よつて十月は茶のまに枝と一尺とつて
又三月は日所くよに地とあつてつらまよ多くとつて
五月はよつて根ますつて水通林下つてこの地
ほてもつらちうゆまの清とつらまよ高年所
花とつらちうてつらまよあよひ月所てまよ
あにらつたあつて元本茶葉を紅にてまよとぬと

十月申より楓樹をく紅葉多しう代葉なり内多
 年よりより西よりして運送あり氣候とくされん
 十一月と旬も雪ありあり元紅葉を去れ
 花をとりけりうふり一田所あり紅葉は
 一総田を紅葉のみとゆ一西よりして今冬
 有し初雪を尾の紅葉を去る雪は花より去る
 運送ありとく是月暖帽と裁く事あり眼
 紅やせハ眩暈ハ疾あり
 十月申よりくくハ大雪あり猪肉と食するあり椒と
 くくハ血脈とやゆの進とくくハ涕唾多し一霜下

くれりハ紅葉とくくハ西よりして先りハ猪肉と
 くくハ血脈とやゆの進とくくハ涕唾多し一霜下
 蕪と食するあり鮭肉と食するあり病疾とありす也
 来書ハ書書よありあり
 十月ハ去候才一水如氷才二地始凍才三雜入大水
 為屋太立才四三候才五才四虹見玉見才五天
 氣上勝才去地才六海閉塞才七大雪才八三候之
 立冬益田才九割田才十分秋田才十一分由雪与小
 波反射 月今度義



梅桑歲時言卷六

十

十一月

首と大雪と云中と冬と云○十一月此名仲冬華月
後胎律と若後と云○十一月の初日を初月と云
と云と異せらる

朔日周乃代去子の月を以て衆者として後れは今日と
かつら周其時の西月元日あり天を以て并つる此義
とどれりとする

冬を以て十一月乃中あり二を以て一と云法極の至二下
陽氣始く此に冬日乃南より北に在るなりと云
冬を以て一日よりして陰氣も長くするなり二下より日
乃一より北より南なり又夜も長くするなり二下より日
乃北より南なり今日一陽氣始くして陰陽氣日

に長く日と夜とや長くたる陽氣始くするなり
と云陽氣始くして夜安んじて微湯と云之閉戸
閉してある事にして人のあつたり又奴僕と云
奴僕と云ひるなり

易曰雷在地中復先王以日閉關商旅不行后不省
方也虎通曰此日陽氣微弱王若承天運物在率天下
皆不復行役扶助微氣來宗地也伊川易傳曰湯始
生甚微安於居後長成復之象曰先王以至日閉關朱子
曰一陽初復陽氣甚微不可勞動

○今日復と云一也人奴僕も亦も之陽復と云す

一又先祖考妣乃孟春月を献し奉納するものなり
果てともむ

○冬を乃日鏡鏡改火ハ瘟疫と云く徳源書終儀
志乃乃人そり福と鏡改火の本と云く火と云く
松子実り冬を乃日なり

天時人事日お休冬を湯生喜又本刺鏡改火添弱
線吹霞亡後初花序若は既得斜折天宮御芝
歌放梅雪由不殊郷國天教見且霞雪中振

○冬をの後十日房事と云く一と云く海乃乃人なり
は比い人乃此氣とゆくひろ光かこくこづて池と云く

いふ本喜喜生根奉と云く一素問の云冬不寒
喜免瘰癧す又冬を乃の後十日燻灸す云く

十五日 孟子の卒せり日なり

崖碑考云孟子周赧王二十六年正月十五日卒即今十月十五日

晦日 沐浴

予の口園乃農民は月乃初代五日回祓と云くとて俗念
と云く冬その服と云くちき男女何すて飲宴一人
と云く事あり乞つもの比より云く一人と云く
賤乃男儀の如きた回祓のいひき何れは
と云く事ありと云く原予知ふと来禱と云く
如く耕作たりと云く原ひの如く農民を重んぶ

八日ありては臘八と云今日電と多し月餅と云す
一集時記に十二月八日経に臘八と云電神と云る案
考又電と云つるを云ふなり乃風俗なり

按ては凡俗に顔頰氏子有り黎と云ふから
祝歌なり記しては電神と云ふなり云ふは
一は是ハ祝歌と電神とす云ふなり又舊事本紀に
身は彦神身津姫神は二神を今乃人此を電
神なりとありてこれより我國の電神之
○今日水と云ふ壺をこに入餅をこし救ふ方
臘中餅水来年治一切疾病製飲食臘八日水

虎神なりとあり

十五日釈迦佛涅槃日あり破邪論に周穆王五十二
年二月十五日佛涅槃すとあり周代は六十月と云
案考すとすは二月八日今此十二月ありと云るは今世二月
十五日と云つる佛滅日とす云ふあり

○上有中旬乃中臘月乃帝より多く春と春
祭にては正月乃用と云ふなりは冬春本
と云く臘日に米と春と祭と事なりと云ふ

范正徳回樂府序曰余居石湖後來田家得米
十更探其法各賦一詩以識風土其一云春分臘日

春米為一案計多聚梓白臘中畢事出子事之土
瓦倉中經年不壞名冬春米又刻齋

○十五日午後屋中乃煤塵と掃く一煤塵と掃に
世人多く物白と乞て恒例恒例之す此世とて或風名此後何
其六物日に物す十五日乃風名乃其腹日と用
関書関書乃漳志を引て臘月廿四日毎忠掃塵也
和色ハ巾着巾着之とあるや乞又物白と物と云
二十日北の乃乃乃と云に 團俗は月中向より後乞人其緯綃
みく西とちひ又緯綃緯綃之と膝膝と膝膝ハ烏帽烏帽之と忌
世と云るといひてあるくの程詞と云と云ハ其あり

くありありと云はるんとハ其まいと云はるなり
却都却都乃乃と云事あり

○下旬内親戚と送物して菓書と雲す又去る
下此親實乃孤獨孤獨之を居困若代考也我力に送て味
物と贈之——或我の蒙る思西乃人師傅と云る
人親身及商人乃病と瘡瘡せし醫師を云と云
其くあつて物と云る——陳腐なりく云はるや其
其物とせんや其せんとうと云はる決一かと云
其く——鄂各なりく云はる鄂各かれハ仲義物ハ
す人傷とあつて——困窮とめぐる事と云す財と



○は月下の午乃日ぬく〜と〜と贈をぬけしに
髪と一毛をら〜きは一年乃百病よはの女きて沈
勢にわ〜と焼その灰と煮よ〜くよ〜地よ〜

二十七日は比鶴と知れす〜は日〜り〜
よのついたき乃常の肉よ別に能を他り今日午此
は用りものと製法〜一脱水〜と能と製す其ハ味
美に〜て久よ堪〜其性利方りあり〜
用りハ日救多く歴〜ら〜堅破方りあり〜
次但大寒其肉よ製〜して〜その製〜り〜
ハ事にやり〜りあり〜元能と製す〜よ〜
ハ事にやり〜りあり〜元能と製す〜よ〜

わりの意よ米と〜〜又ハ切米とあつ〜
阿基ハ必わ〜〜た〜ハ初〜ハ酒よ〜
能れり〜用〜ハ〜〜
〜と用れハ能ゆ〜
〜たす必つ〜
醜酒の〜様米と製〜
〜と〜か〜
〜と〜と〜

二十八日 屠種と合ハ〜

- 醫林集要屠種方 大芡 山椒 桔梗 肉桂 防風

各五方 川烏頭 白朮 菝葜 各一五 右八味對之律囊以

之り除白に井中二掛座に沈め元旦より取

囊たると湯を浸しぬ乾し車を白くこれを取後

に囊を井の中に入れて氣と服す其の當年瘧疾と

石瘧 瘧疾を治す末乃車をり日中まで取

○又方 赤朮 桂心 各七分

防風 一兩 菝葜 五方 蜀椒 桔枝 大黃 各五分 烏頭 二方五分

赤小豆 十四枚 二角乃律囊よこれと乃りそか右り

抄所 赤朮ハ藥材あり根とハ肉桂の皮めく

○又方 大黃 桔枝 川椒 白朮

獨心 烏頭 炮去皮 吳茱萸 防風

○本朝屠毒方 白朮 桔枝 山椒 防風 各一分 肉桂 五分

大黃 二分半

○白散方 白朮 桔枝 細辛 各一五

○渡嶂散方 麻黄 山椒 細辛 防風 桔枝 乾薑

白朮 肉桂 各五分 已上三方典藥頭魚安信懷方也

○五日志の繩と依り治日代用之方

晦日 沐浴 既食倍多より至際と用也

既食此後 土をたふす

長親戚乃 既食此後 土をたふす

尤はくしむくし月令廣義より見えたり

○今年中一歳は用何事と云はれ奉ると今夕中夜は
焚ハ疫氣と云へて四時迄暴風はひんえたり又今夕茶
本と多く焚ハ疫氣と云へて直生神よ見えたり

○俗より云く今宵儂豆と云うなり儂豆と云うは豆の類なり

博多の区儂豆は十月晦日の一かきん忍え侍りみかたなり
金吾宗徳進儂豆と云ふは今宵そは事と云ふなり

と云豆と云うして西鬼と云せざるや世後同答なり
あふひら西鬼乃相約と云ふは博多中をむじりハ
陰陽寮と云ふとよみて上り下り事と云ふは目
ありと云ふ事なりと云ふあり西と云ふくはよきを

ふことゆつと内裏は四つと云ふもんあり又殿

上人を御殿のうらまきと云ふは博多乃草乃矢あり

と云ふと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ鬼と云

らありと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なり

此は事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なり

又云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なり

又云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なり

又云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なり

又云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なり

又云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なり

けりて鬼は目とくらしす 埃囊物と志は
 留る毛石經の鳥籠まのがれを徳乃役と
 了れ毛地と何もらんを口折之れにやぬされ
 備る瘦とあはさるるなり 敷のやうなきを
 周終礼記極終みそのせりそれより後世に
 強信志と志るをひとすめ 証文又選乃強
 衡の東系賦と伴なり又は板赤丸文敷とす
 ろくさすくろく後漢書のはよかえりぬ敷乃
 中の五葉のま今 四信と豆うつを切し 風
 や おんやとひと八鬼と想ひて 方教あり 原氏抄終よあやと信も
備とやらゆりさるるぬらと八追とくさるる けりて

きてりてあぬ人いさかこたふ前ありて佛書よりる 襦袢のこくお
 そろりて形を物ありしきなりきあわぬぬれぬれま
 と御りて御神の靈とさしてなり 法邪乃氣を吹ぬ人
 をとくちあ物かたれとおいたるありて 中法陽ハ二か
 りとさ物なれり 敷のりつらととを備を西く信を邪なり 陽を
 吾るる信を西ありいなる湯とたつひ信とや 信は信なり
 又 四信をさるる鬼をくく 禱をうらとてさるる
 たり 按と信なる人乃信を信なれとて 信とて
 晴中作に終地擲打 信信方鬼眼精と信これ
 大星と擲く鬼眼とうらつとすさるる 信
 志事と志るのつこまへ乃夜の鬼と
 鬼とるを言古たらしめぬとてあはさるる
 ○今おつとのから大戦と折とをひる 同鼻と云

或笑人ひくりに物ゆきせると一うと子も人
 乃若山羅縠をうけ天命をまひ何うそのまひ
 とまぬうまひやうの危年ととらうをねたむ
 力をいれずうひんかんとまうまひ
 たらううまひを乃後才三の成代日と臘日と号し
 ば日邪とまうり又古に聖賢民有功り人とまうり
 よし澤量の減よんえり又玉船を典と臘ハ先
 祖とまうり略る百邪とまうり同りして英いふと
 小室大室二中日乃百今世信よ室の中と様すは
 乃又食物基物とと製すまひあは性よと久く

たぐりて換せ此の時物守り物りよ記す

○糖薑と製する法 母薑と室代中のあひ一七日
 亦又日浸して取わけ皮と去日干貯し
 ○山菜とくらし貯し一を法 此のあひ貯りたり
 年久しう薯蕷とあひ細刀うて皮と去切ふ
 て米粉とあひひくちあまつぬと陰乾す鉄とあ
 ○糯米と粒米と海菜とる法 一日あは漬し
 一日の乾すぬひとらう七次許久しく浸せハ米氣
 ぬきくわし糯米の煮して陰干し粒米の飯
 う粥として病人よ用れハ泄瀉ととめ腸胃と溜

てん脈よりつまひ

○投米と乾飯よりなる法 投米と多く脈水より毎日
 投し蒸籠にこむ曝乾志と瓶に入貯重し一用
 る時雙湯に漬せし速く飲む方粘る方して胸脈よ
 り塞ぎ可あり強行乃時布を包てこれと沸湯に
 投す之ハ勿く飲む方先回用逆布一法中石可強進之
 ○糯米代粉と多飛よりなる法 上は代糯米と煮乃
 くく臘月の水より浸し毎日飲むと少く二三日色く石
 印とく流いて左れ米と磨り多く煮て入へり多れり
 いととく一滓とハ毎い石印とく磨りて又ととく

あまに桶入へると加え一飯重く漬めと去りぬく
 毎日水と換く水花と多し三日くらばる後棉布
 の新袋より代粉と入りてあまと去れよととく
 水ととく煮し但て後よ多く煮入へり多れり
 多去りて又袋より多煮りて多去りて
 去りて袋より多煮りて多去りて
 時又こまのりよりして陰干しとるなりよく乾き
 小入りて煮りて氣の減るなりは多し一用乃時ゆ
 くこねく餅と一雙湯に投して後水より浸し七
 食しぬ事留けはく再煮て食し又赤や豆の煮て

くうたはるるとくけく食の甚多あり性熱泄痢を
こめ脾胃と痛ふ事おけしと再煮て用へし但宿
食氣滞ありあま用へし

○赤小豆とあ花よさらは 赤小豆と守中よ煮く
とくくた袋よ入くして煮り流すのし收まへ
年と行久して中用ても換せす異月一應解の
包よ用てもとあし即附よ用やすじと草とす
○臘水と糖と製し大子切て二三日用て後水
よつれ又二三日用て五分一よ付し米粉と煎
きく又臘あり八五一煮く酒あり熱湯よ入

糞を此肉やと通るや湯の中へ垂く五分一糖
煮と次或久く垂て煎出し熱湯に漬し米
豆粉と衣し一月の程久く片く煮く性熱と氣
と石塞美久くくくく西月中一八二三百よ一度水
を換へし二月より毎日あくと切へしよよつさる
米粉と煮されぬ換へし奥あり

○臘ありし事おと製すし久くして換せし凡
事お大豆と煮くよ大豆を煮し水と石粉斗入
物食のあ後よりに煮ありすく出くしこも後ハ火
のこえ次身よたさして置れしと能くあて氣

乃減らるるに非ざるをばりておろひ夕合るるまでとけい
 能は急熱してありそ何又ぬ火をとたきあてめて
 ぬかー白あくよくばくたれ法あくと飲より四胡
 まてはてをも用一筋いかにさるるをさくはれ
 ぬかぬれぬれと功と多く不費して能熱一
 豆汁不減して性全く味美なりさる火と冬
 くだらるるく變せしめんともれぬ大豆汁ぬか
 てくすしに作るも未熟の味なり
二三平一粒分、
 考れぬ味持せす

○白米茹乃製法 大豆を石皮と去水後一

蒸し熱して上白乃米麴を石五斗或石入塩三斗
 合くよくくうとつと桶よばぬ並三斗日たさるて
 用の味極く甘く色白

○五斗米茹と製する法 大豆一斗麴一斗酒糟一斗
 米糠一斗塩一斗石一斗よつと合するなりぬりのりて
 よりい未熟性極く勝中につるは次病人は用てより
 魚肉をくくと煮くればよ

○ぬかそそと製する法 米のぬかとあつてぬかこぬ
 甑みて能ひして熱したる何火とたさるるをさる
 並ぬか白あつとさる何煎かぬり一石よ塩一斗米

并湯油のうごと入白く終つるまであつげ温氣
乃強りたるをさへ桶あつても瓶あつてもはらひ
あつて至末年正月よりあつて又白く入りたる
器に入る

○又法ぬくとあつてかくこQ大さあつた
に海苔やまぬくあつても瓶はくも入至十
又日作とてかくくあつて白く入りたる
くまもあつても白く入りたるあつても桶
て毛瓶はくもあつて入りたるあつても
くまもあつて入りたるあつてもあつても

臭かひ良はるり腹中へに氣滞りま食滞りしうと
病人に用へ

○厚鳧と塩淹する法 厚鳧を丸毛とぬきまて
腸と去洗りす毛核をいへるあつても腹上塩とあつて入
又あつても腹所あつても塩とあつても入又あつても塩と
よく付足しつるあつてもあつてもあつてもあつても
一板とけの塩ゆきあつてもあつてもあつてもあつても
苞よつてもあつてもあつてもあつてもあつてもあつても
○塩海鏡の法 海鏡と能くあつてもあつてもあつても
桶あつてもあつてもあつてもあつてもあつてもあつても

能一切乃癩疾及瘡疹癩癩等れ瘡毒疥疥時疫と
 治し目疾とりやこれとほとけり疥とゆれ人時
 散美りて久々瘰癧とて鮮肉と浸せらるる月を擦
 せ又又敷百果菜蔬乃瘡子と浸せらるる多くして
 散とせや子其日にとりて多て六畜の瘡疥疥病
 と治むと月令度穀よりえり又いとく臘膏水とて
 含敷とのりて煮く虫相押散るれ夜とすれは不
 臘月とあめぬり香油と焼く油子とせり徳器不
 菓に用て疥効有り婦人の疥はぬれは散るく光
 孔生や子多之瘡を終果の用とて一飲食菓等

これと用く功他油一倍は又臘月の結脹とて
 貯て膏菓等より合す一と月令度菓よりかん
 元刀劔鉄杖等ととごり十月より正月までの間に
 下りた桂よく煮く瀟生世の疥を中とりて良す
 柳の枝と切て煮去れおよ地は挿は結ちりて根とせ
 び月忍冬若と細垂しこれと夏月菓れとく瘡
 てのめは瘡疥と瘡す
 冬月甚多りて瘡之の者ハ後とく力冷て凍死し
 或冬月あるは煮く凍死とりとり何り何腹すくは
 微氣あつたを煮く力冷夜と腹去て常人れ煮て腹

片の衣とこしとこれとつこもろとめ米と飯糰一へ袋
 に入んとしと麩子へ一米ひゆきへ又他の袋よ飯糰一
 たる米とへく麩子へ一或火とたきり竈の下に糞灰
 と用りもへへるうけして為瀝より目用氣同く
 後必薑湯温酒粥をことりて保多すへ一先をこ
 と温すへ火とひこくわづの冷動と火氣と争く
 必要す又雄黄煇石等かと用て末に赤眼角に貼は
 縦横抽志よとく十一月甲子の抽と食らへは切らへ
 麩子へ一月令度義よとく猪肉猪肚肉生椒と食らへと
 已毛取よ輝石果菜と食らへは進と多食らへは元

抽れ筋骨と食事かられ来る書にいとく鑿と食
 らへる人にと害す牛肉と食らへるは神とや
 ろる蛇と食らへるは神氣と持す蚌蝦乃類と食
 事かられさへは腹よとくは月のと平政と食へ
 一他月これと食へは病と成す
 損軒乃後よ雜書の中はと逐月の食物禁忌とを記
 その多し毎小某月某物と食へは某病と成る
 一不於陰陽家の物志と後とと一詳よを辨る
 記さす冠えりふ気ととくは古れ方書にをいふ言
 さら亦依家本草に記さる裁らる所のなれ多し考

作守へりし決しよりあられも今付書よの雜書此後
たをそまう載て人の披閱に便をうれ可なり
凡ん人此擇くこれとを程とるよまのこ

十二月乃古候牙一層小郷牙二層如巢牙三層如雛太
少多れ三候あり牙四層如乳牙五層多屬疾牙六
水澤腹堅太大多れ三候あり
去年八月令及臣氏其秋
准吉和子等よ半あり

十二月屋敷乃刻數少多六台小鼻反射大受八与大
鼻反射之 月令度書

日本家時記卷之七尾

附 都鄙祭事記

正月

元日 夢中御節會 ○二日 車箱本影寺松籠子 ○四日
花多井殿遊鞠始 ○七日 夢中御節會 終 笠面山系
才天系 茶摘川祓子 ○八日 十日と一後七日御節法
○十日 西之文夷系 ○十三日 南都心經會 ○十四日 十七
日と伊勢山田師子氏祓子 ○十五日 茨城爆竹 茨城祓
如子能 河内國平云沖粥 尾末國博取松籠子 ○十六日
林多井御節會 終 終林寺大放花 湯原國魔堂念仏
○十七日 伊人祓子 終 厄丁 ○十八日 林多井爆竹 ○十九日

八幡疫神系 廿九日と注此系 ○廿二日 本山善心寺
初遊正信 ○初宣 勸修寺

二月

朔日 七日と南無西多也同中宮と二月堂新 ○四日
初年宗 ○七日 十石りと南無勢の能 ○九月 十石り
少野新也達きと南無勢 ○十日 本山麻苑寺系 ○十一日
涅槃會 暖藏大徳松 在る西多也 ○十六日 後塔
○廿日 濱月系 ○廿一日 天正寺 伶人森 ○廿五日 送西
寺系 少野天祿御三石 吉祥院子く
八徳有り 龍前守府天祿系 ○
初卯 大系系系 ○初午 福壽 志女堂 車橋寺 鐵

注之 和泉國水乃と初午系 ○上申 春日系 ○彼存也

三月

三日 楚中關籠 イリカ 恒春卯午 石山系 聖律系 土伏
初午 卯午 ○又日 一多寺系 修多寺系 ○六日 一多寺
能多 今日より十八日と暖藏大宮佛 ○八日 泉涌寺 一多
系 ○九日 水尾系 泉涌寺 石山系 神の形 ○十日 今多
安樂系 ○十一日 吉野會式 花見 ○十二日 今多
日と天台経系 律 日表八石の
初遊之也 今日より十八日と善遠寺 大師
系 本山永観堂
中々也 ○十四日 壬生會佛 サカノ ○十五日 比良系
武別角田川 大宮佛 山崎火の政 ○十八日 深後系

博桑庵時記卷七附 三十四

○十九日 湯後新也身杖。○廿日 東寺仁如弘法親從
之雄女坊。○中の午午の日云々付ハ初の午初の午云々 掃帚の由出。 子年
亥佛九用 之流柔摘。 石清水臨時也。

四月

朔日 比列苑麻也。○二日三日 南都多衣の能。○四日
廣康也。 龍田也。○八日 灌佛。 山門戒壇堂之在能。○
九日 法多也。○十日 南都の法事。○十一日 三
井寺之園也。○十七日 紀州和歌山也。 雜賀踊
日之山本熊之也。 尾列名古承後殿之也。○廿日 勢
田量也。○廿一日 高尾也。○上卯 掃帚也。 山藤也。

○上辰 八幡也。○上巳 山科也。 比列多也。 同堅田也。
○初申 大原也。 平井也。○初酉 松尾也。○初亥 大津也。
○中子 吉田也。○中卯 比列八幡也。○中辰 向日也。
○中巳 久世也。○中午 笑也。 比列若の也。○中
申 笑也。 山王日吉也。 岩上也。○中酉 笑也。
笑也。 松尾也。 梅也。 園日願聖也。 津之也。○中
亥 湯後也。

五月

朔日 笑也。 菟子足掃。 比列松中也。○二日 笑也。 菟子
笑也。 菟子足掃。 園の也。○七日 今文也。 興也。○八日

三十一日 懐州宮明神宗 ○十二日 今更宗 ○廿日
多作宗元 ○廿三日 坂本支社宗 ○廿八日 住吉河田人
○晦日 祇堂河内院

六月

朔日 廿日と富去法 ○二日 高藤の虫掛 越 ○五日
祇園會渡り初 ○七日 祇園會 今日より十日と祇堂
御旗宗 ○十四日 祇堂會 尾州津島宗 竹生宗
後後朝天子宗 ○十五日 尾州津島宗 江戶寺宗
尾州津島祇堂會 他山宗 寺宗 小倉祇堂會 ○十六日
今日より明日と伊勢會宗 ○十七日 相國寺懺法 志願寺

空 廣島宗 ○十八日 祇堂河内院入 ○十九日 河内河原
納原 七月朔 ○廿日 納原切 ○廿日 納原と礼の納原
○廿二日 大坂左衛門宗 ○廿三日 松尾宗 ありて能三友
明日と友 ○廿四日 尾定干日法 ○廿五日 法寺の出干
三舌虫掛 大坂天後祇 楊立宗 ○晦日 聖殿五月
法 住吉河内院 河内河原宗 日宗 ○五月廿五日 住吉河内院

七月

朔日 聖殿後日法 ○六日 少野河内院 ○七日 少野河
壇煤拂 事為虫掛 并他坊立祀 苑名并反翻 乙伏
参入 ○八日 久珠會 ○九日 古尾法 ○十日 法水子日法

○十三日十五日とあかす煙籠 ○十四日禁中煙籠 ○十五日ハ愼安岳の院 三升と云女宿 甚樂施儀鬼 今月
ハハ明日と云成心不動子日也 十七日と云水浦と云院一升
帳 ○十六日と云火事ハ大の字 松尾後出の字 西和之殿約
水の火 松尾後出の字
五重九ノ山ノ
今日まで
勢別 尚多事入 ○十七日 素多事日也 ○十八日 所重
之沖出 ○廿日 地毒也 ○廿一日 傳別 湯之文 踊

八月

朔日 禁中一 ち方より沖言をき上 松尾お様 和泉國
村空 明り ○二日 堺天祚也 ○三日 山形天祚也 越前

敦賀氣流江文也 ○又日 以別白殿一升帳 山ノ下ノ山
きて一升く ○十五日

伊予ハ帳系 尾久ハ帳系 尾系 畑技系 八幡殿生令 老女
之依之系 七坂江川と云火 度伏月也 以天深川ハ帳
系 中門老海系 後前前帳系 ○十八日 沖重系 素多
事 ○廿二日 度津寺子也 ○廿二日 廿三日と云院前太宰
府二天祚也 ○廿四日 吉田也 ○彼岸會

九月

四日 山形系 本帳系 ○八日 龜海寺令利會 ○九日 彌言系
老布祿系 院前系 代方沖重系 大坂生也系 院後
言良大明系 肥前と云係 院前系 ○十日 下等系

大津口後之祭 五條天神祭 寺田の文祭 依方山香祭
 ○十一日 伊勢寺幣 岸吉田之伊勢御被會 ○十二日
 左秦祭 ○十三日 白川祭 ○十五日 宗倉祭 栗田口祭 江丸新田明
 神之三年上之祭能馬 河内之祭 寺前小倉祭 ○十六日 東
 山居傳祭 三谷祭 ○十七日 栲別池田呂服漢祭 ○廿日 下系
 中女祭 多敷祭 竹田祭 建仁寺門外夷祭 整昌之祭 飯地
 の氏 ○廿二日 大坂府慶祭 沓祭 ○廿三日 左秦祭 ○廿四日 國師祭
 本福祭 淨寺祭 麻呂祭 別達祭 ○廿五日 天馬流満之祭
 田五祭 ○廿六日 山祭 ○廿七日 栲別池村祭 ○廿八日 湯瀨祭 大坂松
 五祭 ○廿九日 月防之祭 ○蒲月 中甚祭 之湯市祭

廿十月

又日 坂倉遊之祭 十五日 之湯市之湯市十夜 ○六日 南極無病
 寺法之會 ○十日 栲別金良祭 十一日 之湯市之湯市十夜 ○十
 二月 日蓮系新儀 ○十五日 湯邊麻王院靈玉正院 杉尾全利
 丹徳 ○十六日 高橋寺之丹徳 ○十七日 肉肉御被祭 ○廿日 江
 戶徳商人夷祭 四條寺町土佐系之夷祭之辨 ○廿五日 寺夫社祭

十一月

八日 水いづる祭 指搦祭 ○十二日 舟也祭 ○廿二日 一向寺之寺之
 廿五日 寺之寺之佛名 ○廿七日 大師儀 切妻大師 ○廿八日 廿八日
 喜日御祭 ○晦日 之祭 ○初申 大文権現祭 ○初寅 結神祭

